

## 連載：「世界における非核・脱原発への挑戦⑬」 回想の中の欧州平和博物館

若尾祐司（名古屋大学名誉教授）

古い話になる。2008年の夏、ウィーンから車で3時間、ハンガリーとの国境地帯にあるシュライニング城に向かった。不便な地だが、ウィーン大学教授エーマー夫妻の案内で、この城にあった欧州平和博物館と手前の旧シナゴグ（ユダヤ教会）を訪問した。この城はオーストリアの歴史を映し出す鏡でもある。訪問時の記憶をたどり、また最近のネット情報（Friedensburg Schlaining で検索可）を参考に、この城の過去と現在を紹介したい（図1）。

\* \* \* \* \*

### シュライニング城の歴史

まず、この城の歴史である。イスラム圏とカトリック圏の境界にある、この地の砦の存在は13世紀の文書に登場する。15世紀に強固な城塞が築かれ、1527年から1848年革命期までハンガリー伯爵バッチャー二家の所領となった。1848年ハンガリー革命で、バッチャー二・ラヨシュは最後の当主となる。彼はリベラルで同王国の初代首相となり、ハプスブルク帝国の反革命軍によって処刑された。その後、城は個人に買い取られ、幾度か所有者を変える。その間、第一次大戦後にこの地はハンガリー領からオーストリア領に移り、第一共和制の発足でブルゲンラント州（現在の人口約30万人）が構成され、この州に属した。そのブルゲンラント州政府が、1980年に同州の文化振興政策の一環として城を買い取った。

同州の文化政策を担当したのは、G. マーダー（1926-2019）である。彼は高卒後に徴兵され、第二次大戦の最終局面で1年間戦闘に加わった。西部戦線への配属で運よく米軍の捕虜となり、戦後はすぐにウィーン大学で法学を学んだ。1948年に博士試験に合格し、ブルゲンラント州の労働会議所に職を得て同州に定住する。その後、同州で弁護士事務所を持ち、社会民主党の法律相談役となり、国際人権連盟のオーストリア支部長も務めた。B. クライスキー連邦政権の成立で、同州の文化部長F. シノヴァツが連邦文化相に就任したため、その後任として1971年に同州の文化部長となり、この職を1984年まで務める。

この1980年代前半、ソ連のSS20配備に対抗するNATOのトマホーク中距離核ミサイル配備の決定に対し、米ソの谷間にある欧州の人々の危機感は一挙に高まった。反核運動の火が燃え広がり、新左翼の歴史家E.P. トムソンの「抗議して生き残れ protest and survive」や森滝市郎の発した「ユーロシマ」が、人々の合い言葉になった時代だった。

こうした時代背景の中、購入した城の積極的活用を図るべくマーダーは、1982年に「平和研究・平和教育センター」を設置し、センター長としてこ

の事業に専念する。1985年にはクライスキー前連邦首相を委員長とする100人委員会を設置し、センターの名称も「オーストリア平和・紛争解決研究センター」



（図1）平和の城シュライニング

<https://www.friedensburg.at>

2025年10月1日）。

（英語名は同平和研究センターACP）に改称した。

### ACPの基本理念と活動

クライスキー自身の手になる同委員会声明は、センターの基本理念を次のようにうたった。「すでに前世紀に、国際平和運動はオーストリアのノーベル平和賞受賞者ベルタ・フォン・ストナーから決定的な推進力を与えられました。十有余年に渡りシリア（1972年以来）やゴラン高原（1974年以来）で、合計2万人のオーストリアの兵士が平和維持活動に従事しました。これによってオーストリアは、緊張緩和への重要な貢献を果たしています。しかし、これだけでは十分ではありません。平和維持の問題をあらゆる側面で学び、紛争の原因を究明し、平和の理念を広げられる場合にのみ、民主的國家において決定的に重要な意見の形成が可能になります。……改修されるシュライニング城は、この使命に献じられます。オーストリアの永世中立と共に、この使命が果たされるのです」。

このように、平和と中立の二つの価値を基準に、またデータに基づく確かな裏付けによって、平和

創出・紛争解決の現実的方策を探り、かつ貢献することがセンターの目的である。同センターは城を修復して整備し、宿泊施設や会議場を建て、毎年国際的な平和研究者会議を開催し、軍・民両用の平和維持活動の研修を実施した。また、旧シナゴグを改修して平和図書館を開設し、ユネスコに働きかけて設置した「平和・紛争研究大学」(EPU: 国際 NGO) は3ヶ月の春と秋の学期で、1998年から修士号も認定された。

こうした活動の上に、2001年にマーダーは全国展「戦争か平和か」を開催し、その反響は大きく、これを城内の常設展示にし、欧州平和博物館が開館した。その主なトピックは、好戦的暴力の原因と構造、日常的暴力から抜け出す方法、個人や集団の紛争プロセス、平和研究と平和教育、平和アクターと平和政策、人権と世界平和である。

展示の最初は広島・長崎の原爆雲パネルに始まる(図2)。印象的なことに、そこから一拳に弱者



(図2) 広島・長崎の原爆雲パネル  
(若尾撮影、2008年8月)。

に対する強者の日常的暴力に飛ぶ。子どもに対する大人の、女性に対する男性暴力のパネルにより、日常の権威主義的暴力が問われる。そして第一次および第二次大戦の戦場郵便(兵士の手紙)、野戦病院と看護師、戦場風景、戦後世界における経年の戦死者数一覧など、国家暴力の図示が続く。以上が第1部で、第2部はオーストリアの平和運動が過去から現在へとたどられる。スットナーの著書や遺品(図3)、戦間期のドイツ平和協会や国際和解連盟の活動家たち、戦後のロベルト・ユンクの著作など、多数の平和活動家の遺品類と説明パネルの重厚な展示である。

この時期、クライスキー政権(1970-1983)の教育・家族法改革を経てオーストリアでも、子は親に、妻は夫に従うといった権威主義的服従関係が問題となり、近代社会の家族が温存していた私的暴力(夫権・親権・懲戒権)を破棄する動きが強まって

いた。「平和」の主要なテーマも、そうした世代や男女など具体的な人間関係の序列を排除する、「子どもの人権」や「女性の人権」といった社会的弱者の人権の定立にあった。

### 欧州平和博物館の閉館

だが、この社会的および文化的暴力の排除が志向された時代、同時に新自由主義の時代潮流は共産圏諸国をも巻き込み、旧ソ連邦と東欧圏諸国を解体し、中国の世界市場参入と高度経済成長を促し、通信技術の高度化とも相俟って地球規模の格差化と温暖化による人々の生活・生存危機を招いた。この事態を前にマーダーは晩年(2010年)、現在問われるべきは「平和の文化」に依拠する「経済・社会・環境政策」であり、平和研究の課題は「経済と紛争」にある、とした。すなわち、自覚的な市民社会の協力による政治の介入で「資本主義を調教」し、「公正な経済システム」へと方向付けることである。新しい市場(社会的市場)の論理を追求し、別の資本主義を、誰もが救われる社会的民主政治を導くことにある、と。

しかし、この経済的暴力を課題とする、平和博物館の刷新はなされなかった。ブルゲンラント州は100周年記念事業と銘打ち、城の全面改修のため2019年に欧州平和博物館を閉鎖した。改修後の2021年には「平和の城シュライニング」と命名し、記念展「私たちの百年——ブルゲンラントが刻んだ歴史」を開催した。この記念展を基礎に現在は地階から4階へ、「城の歴史」、「1921年以後のブルゲンラント」、「ACPの活動」、「ブレゲンラントの現在」が常設展示となっている。

この展示の変更は、世界平和の志向から過去のルーツ志向へという、国際主義から郷土主義への後退なの



(図3) スットナー『武器を捨てよ』  
1889年と彼女の手紙類(同前)。

か。自らの生活の場の歴史を正確に知ることは重要であるが、世界的なナショナリズムの高潮にのみ込まれないか。今は疑問符である。平和・紛争研究大学と平和図書館も、2020年前後に幕を閉じた。

(本会常任世話人)